

経済学部ゼミ連合会

関東最大の学術発表会運営担当

関東最大級の学生の学術発表会「第55回インナー大会」(日本学生経済ゼミナール関東部会主催、日経ビジネス協力)が11月22日、生田キャンパスで開催された。今大会は本学が高千穂大学とともに幹事校となり、本学経済学部ゼミナール連合会が中心となって、1000人超規模の大会の準備運営を担った。

同大会は、経済・経営活動活性化を目的に毎年商学を学ぶ学生の研究 開催しており、討論部門



▲ 討論部門で意見を発表する専大チーム

とプレゼンテーション部門で日ごとの研究成果を発表した。

討論部門には17大学から95チームが参加。本学は出場校中最多の15チームがエントリーし、労働、国際、財政、マーケティングなど、同じ分野を研究している他大学ゼミと議論を深めた。討論時間は2時間以上及び、参加者は熱を込めて持論を展開したり、相手の質問に答えたりして研究テーマについて理解を深めた。



▲ プレゼン部門の開会式であいさつする関大生

らに研究テーマについて理解を深めることができると、ゼミ連での活動は、多面的多角的な視点を養うと同時に、ゼミ内の活性化や個人の可能性を広げる機会拡大になると専大生もいえるが、学びの機会を

垣根越え議論できる場を

専修大学経済学部ゼミの各ゼミ)で活動していることを整理し人前で話すことで、情報処理能力や論理的な表現力など自身のスキルアップにつながります。まず一つ目は学内討論大会です。毎年7月、各ゼミの新生がさまざまなテーマに沿って議論を行います。普段他のゼミと討論する機会が少ないと思えますので、今年度からは当ゼミ連と高千穂大学が共同で大会運営を行います。また、大会に向けて日軽に s.keizai.zemirain@seiryo.ac.jp まで問い合わせください。また、来年度よりHPを開設予定

委員長 岡野 希春(経済3)

日本学生経済ゼミナール関東部会が主催する関大に向けた方法を模索します。興味のある方はお気をつけてください。また、来年度よりHPを開設予定

を大切にしたい。積もって行動、研究している。その姿を間近で見ることができ、大変勉強に得られるものはたくさんある」と話した。プレゼン部門局長を務めた関大太さん(経済3)は「プレゼン部門の参加者は皆自分の考えを

就業体験の成果を発表

文学部人文・ジャーナリズム学科の3年次生24人が夏期休暇中に行った「インターンシップ」(就業体験)の成果発表会が10月3日、神田キャンパスで開かれた。同学科の受け入れ先は新聞社、出版社、放送局などメディア系の企業や印刷会社、公共機関、N

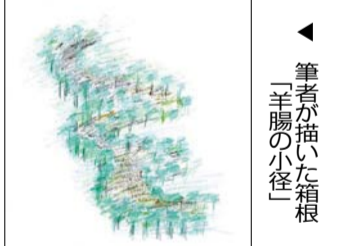
取材や中継現場に同行

寄稿 鈴木花菜(文3)テレビ局で研修

福島中央テレビは郡山にいたいと思えました。市にあり、福島県本宮市出身の私にとってなじみのあるテレビ局です。そこで、取材や中継に同行して番組制作の実際を知り、編集作業の立ち会い



▼ 成果発表会で活動を報告する鈴木さん



▲ 筆者が描いた箱根「羊腸の小径」



日本語

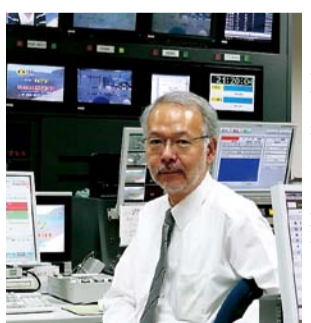
杉浦由紀子 経営学部非常勤講師

日本語、日本事情などを担当してきた中で、心に残る外国人学習者のことばがたくさんある。◆イタリア人男子留学生。日本の高校生の生活と意見を知りたいというので、息子さんがいる知人を紹介した。1時間ほどインタビューをし、その後、授業で発表した。恥ずかしそうに大汗をかきながらプレゼンしたその最後に彼は言った。「〇〇さんは、高校2年生で恥ずかしい人で、私も恥ずかしい人——彼の言う「恥ずかしい」は、'shy'のつもり——です。恥ずかしい人が恥ずかしい人をインタビューしたので、タイヘンでした」と。クラス中が大笑いした。

◆箱根に旅行した英語圏の学習者。帰ってきて『ようちょうのしょうけい』(羊腸の小径)って面白い!』と言う。バスの中でガイドさんが歌ってくれた「箱根八里」の中の、この僅か9拍の、漢字を使うならたった5文字の表現の中に 'the narrow roads that wind like sheep's intestines' の意味があるのをしきりに感心していた。日本語が漢字を取り込み、さらに「オン」と「くん」の両方で使えるところがいかにも有り難いかをこちら

再認識させられた報道姿勢

研修を担当した佐藤さん。鈴木花菜さんが体験した研修は放送局の仕事そのもので、番組が出来上がっていく過程すべてを体験してもらいました。2週間、彼女は日々追って成長していきました。研修の終盤では中継現場で編集機に触れ、ダビング作業もこなしました。鈴木さんから問われズシッと胸を突かれたことがあります。「福島第一原発事故で、なぜすぐに駆け付けなかったのですか——取材での基本動作や志を、決して忘れてはならないと改めて思ったものです。今後鈴木さんにはもっといろいろなメディアを見てほしい。さまざまな体験を糧にして自分の道をみつければいいと思います。」



▲ 研修を担当した佐藤さん